

# TREND IN ALLERGY

アレルギーをめぐるトレンド

WATANABE Rei

渡辺 玲

筑波大学医学医療系皮膚科講師

## ヒト皮膚resident memory T細胞 Human skin resident memory T cells

近年、一旦組織に移行したのち組織にとどまり続けるresident memory T細胞の存在が報告され、その機能の研究が進められている。本稿では、ヒト皮膚resident memory T細胞と皮膚疾患とのかわりを紹介する。

Resident memory T細胞( $T_{RM}$ )は、一旦組織に移行したのち循環に戻ることなくその組織にとどまり続けるmemory T細胞分画である。腸管、肺、生殖器、皮膚など外来異物の侵入に備えるべき上皮組織で確認されており<sup>1,2)</sup>、そのfront line barrierとしての役割が推察されるが、脳神経系、腎臓、脾臓など、本来病原体の存在しない組織でも報告されており、組織の免疫恒常性保持にも役割を有すると考えられる。

$T_{RM}$ の特徴として報告されているなかで共通するものに、CD69と $\alpha$ Eインテグリン(CD103)の発現が挙げられる。CD69は従来T細胞の短期活性化マーカーと理解されてきたが<sup>3)</sup>、組織においてはCD69を組織保持のマーカーとみなす考え方が主流となりつつある。また、CD103は上皮細胞に発現する接着因子E-カドヘリンのリガンドとして知られ<sup>4)</sup>、 $T_{RM}$ がCD103とE-カドヘリンの相互作用により上皮細胞に結合することが推察されるが、確実な見解は得られておらず、より明確な $T_{RM}$ マーカーの発見が待たれる。

マウスにおいては腸管、皮膚、脳神経系、肺、生殖器をはじめ、多くの臓器に $T_{RM}$ の存在が報告されている<sup>5,6)</sup>。ヒトにおいては報告に限られるが、そのなかではヒト皮膚 $T_{RM}$ の解析が最も進んでいると言える。最初に皮膚T細胞の実際の動態を解析した研究は、皮膚T細胞リンパ腫